自由美術

2017・3・10

目　次

新会員の紹介 P1

《平面部》
宍戸美恵子　大石真澄　宮下光子
三輪研一郎　小松照雄　竹越仁恵
石井ゆき　宮田啓子　善相原昌代
藤田和子　吉﨑紀子　水上里美
加木屋満　岸川理子　中條倫子
山田哲夫　元藤郁子　松山由美子
岡野修巳　加藤絢　杉崎一枝
長門ふみ子　丸山栄美子　鶴巻加代

《立体部》
辻忍　佐藤和夫

受賞者の紹介 P17

自由美術賞《平面部》該当者なし
《立体部》渡辺知平
鬚光賞　伊藤雄人
平和賞《平面部》仲隆三　坂口利夫
《立体部》該当者なし
新人賞《平面部》宮下光子　吉﨑紀子
《立体部》辻忍　辻本又慶
佳作賞《平面部》阿久津隆　五十嵐久美子　坂田均
田中敬子　山田哲夫
《立体部》中西保裕

`15 新人賞展を見て P24

竹越さんの空そして木々のカタチについて　國定正彦
創っていく人でありたい…吉田朱里の仕事　吉見博
青砥伊臣さんの作品　田中秀樹
山崎　史さんの作品評　岡村光哲

展覧会より P28

手島邦夫 展「冬の旅」　加藤義雄

追　悼 P30

川上十郎さんありがとうございました　窪田旦佳
久田　弘氏　関正和
田守正道氏を悼む　吉見敏治
～二度会員になった同世代人～
米坂ヒデノリさんと木彫　中嶋一雄
渡部一重さん・風の如く　森真
垣内治雄氏を偲んで　下倉節子

個展・グループ展記録 P36

表紙　大石　尚「△の構図」（H65×W105×D62cm　木）

新会員の紹介

私と描く事

宍　戸　美恵子

宍戸美恵子　　「クロスM」

子供の頃から写生は苦手だった。テーブルの上のモチーフ達は、画用紙の中に小さく切り取られていた。色の世界が好き…。

非現実的なもの、具体的な意味を持たない形に惹かれていた。それは抽象というものなのか？無学な私は、とりあえず無機質なビンの形を借りて「具体的では無いもの」に近づこうとしていた。

そんな頃、自由美術と出会った。強烈な個性の塊集団、一枚の絵に唖然とした。又ひとつ見えない世界が開けた。

「クロス」人生はなかなか思いどおりにはならない。行く手を遮られる、突き当たる。そんなもどかしさを表現しようとした。フォルムは少しずつ変わったが交差していくことは続いている。初期の頃は抵抗や戦いといった負のイメージがあったが、最近は出会いや巡り合わせと変わってきた。

私は誰？ 私はなに？ の自問自答に、今回の作品から染み透ってくるものを感じた。それは以外なもののようであり、当然のようでもあった。

制作に掛かった時間は？ と質問される。生きてきた分だけの年月が掛かったといつも思う。よかった！ 続けることに意味はあった。

描く事は決して楽しくはない。が描ける事はいつも嬉しい。

支えてくれる多くの皆様に、今までの全てに感謝している。

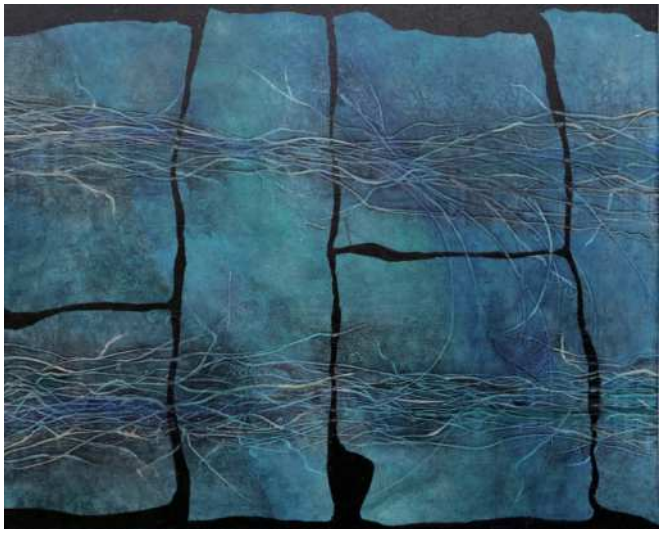
新会員になって

大　石　真　澄

自由美術の新会員になり、本当に心からうれしいと同時に、これまで自分に係わって下さった全ての方々に、深く感謝しております。

初入選から15年間続けての入選は、私にとって次作への意欲作りに、とても貴重なことでした。

しかし、自分らしさが表現することができているのか、悩みは尽きませんでした。



大石真澄　「錯綜」

５年程前からマチエールを主にした技法を取り入れると今までにない面白さが出てきました。これを更に工夫したのが、流線です。画面の中の流線は、力強かったり、細く消え入る弱さであったり、まるで人間の生命力の様に感じました。消しては作り、又消しては作りをくり返しながら一本一本の線に思いを込めた作品です。

自分のやりたい事は何なのか、何を感じ、何に感動するのか、何度も問いかけながら、キャンバスに向かって筆を進めています。

今後も会員の一員として、日々精進してまいりますので宜しくお願いします。

自由美術と出会って

宮　下　光　子

自由美術展に初出品したのが 2006 年。10 回目となる 2016 年は新人賞、新会員と記念すべき年になりました。10 年前の春、京都造形大の恩師である小西先生の作品鑑賞に広島巡回展に行ったのが自由美術との出会いです。広島会場の作品群に、新鮮さと驚きと感動を覚えたのを今でも思い出します。私も自由美術の世界で創作活動をししてみたいと思い、気が付けばその年の秋の本展に出品していました。50 号の小さな作品でしたが、初入選の知らせを聞いた時は嬉しくもほっとしたものでした。それ以後、毎年本展に向けての作品作りが主な創作活動となりました。

人物をテーマに表現してきましたが、キャンバスに向かうということは、私自身と向き合う事になります。描き進めていくと混沌とした迷宮世界に迷い込んでしまい、強い不安と焦りの中、迷宮世界から抜け出せない私がいます。もがけばもがくほど深みに入ってしまう私。いつも自問自答し、模索しつつ制作してきました。今回の「変身」は、迷宮世界から一歩抜け出せるきっかけを作ってくれた作品のような気がします。これからも深く自分自身と向き合いながら、作品作りをしていきたいと思います。

宮下光子　「変身」

納得のいく描画を求めて

三　輪　研一郎

三輪研一郎　　「慣」

不条理で理不尽なことを受け容れる度量のない私は、憤慨・激怒・激情とどう折り合いをつけ、寄り添っていけばよいのかと、右往左往している。諦観感情の誘惑に引き込まれそうになりながら、弄んで行き場を失ってしまった衝動を抑えることができないままでいる。

したがって、描きたいもの・こと・メッセージは、無限にある。特定の色の無い不定形で不安定な曖昧模糊とした世界…例えば感情･感性･感度・想い・願い・心の動きなどである。描きたいもの等は、無限に拡散していくことに反比例して、描くことが可能な気力・体力・時間には限りがあるだろうから、残されている私の命とのせめぎ合いである。

思っていること・考えていること・伝えたいことを表現できる手段として、描くこと・描き続けることが、今の私にとって一番しっくりと適合し納得のいく行為である。

自分の思いを文章で書き表すことができるのであれば、考えていることをわかるように話すことができるのなら、私は描くことに固執しなかった。

描くことは、私にとって納得のいく表現方法であるが、納得のいく描画にまでは至っていない。きっと命が果てるまで求め続けても到達することのない領域でありゴールなのだと思う。

納得のいく作品は未だ皆無。出来る限り納得のいく描画を求めて描き続けることができれば本望である……。

これからの創作へ

小　松　照　雄

この度、自由美術協会の会員になれた事を大変うれしく思っています。入選･落選をしても、会員になっても、なれなくても、私にとって自由美術だけが自分の画面の力量をおしはかる信頼出来る団体です。

これから少しでも、先輩方のレベルに近づける様に努力して行きたいと思います。

小松照雄　　「静物」

絵を描く

竹　越　仁　恵

竹越仁恵　　「木々のカタチ！」

私は現在、木をモチーフにしています。木の自由さ、潔さ、多様性が、絵を構成する私の都合に合っていると思います。具象だと言われますが､具象も抽象も意識したことはありません。風景であっても、見たものをアイテムの一つとして再構成することがおもしろく、絵をつくっています。描きたい絵の構図やテーマが次々と出てきて、早く形にしたくて急いで仕上げてしまうことが多いので、段取りを考えてていねいに作業することが課題です。

絵を描くこと。生活すること。(これに時間がかかるのです。) 他にもいろいろやらなくちゃならないことがあってなかなか絵を描いてばかりのまじめさはないのですが、一人でぼおっと描いている時間が長かったと思います。今は、絵を展示する仲間に恵まれ、批評しあう場ができ、今回、会員となったことで、さらに刺激を受けるチャンスが広がりました。喜んでいます。

自由美術について、詳しく知らずに会員になったことに、若干の不安はありますが、ここのところ多数の新会員が誕生していることを考えると、会員が入れ替わる時期であり、変化が必要な時期なのだろうと感じます。新しい出会いを楽しみにしています。よろしくお願いします。

新会員になって

石　井　ゆ　き

自由美術協会の歴史を垣間見て、多くの憧れの作家が関わっていることを知り、この一隅に参加できる喜びを感じている。

随分昔のことであるが、新聞をめくっていると、一見子供の落書きかと思える小さな絵に目がとまり、妙に惹きつけられた覚えがある。それは子供の頃よく目にした日本海の寒村に打ち寄せる荒波と重なっていたのかもしれない。当時、私が思い込んでいた絵とは違い、刺激的で新鮮であった。

それから何年か過った頃、「画家　野見山暁

石井ゆき　　「地底から」

治展」を観る機会に恵まれた。かつての氏の絵と通じる多くの作品に触れ、奔放な筆遣いから生じる生命力に、満足感を得ながら美術館を後にした記憶がある。

かつて、氏がこの会に加入していたこと、数々の秀作を残した多くの先達が自由美術の伝統と歴史を紡いできたことに、今あらためて思いを馳せている。

作品づくりのなかで、自分なりの想いを少しずつでも表現できることを願っている。

そして又、新たなスタート

宮　田　啓　子

長く古代遺跡にこだわり続けてきたが、暫く離れてみたいとも感じていた。数年来登ってきた高山のスケッチが気になりだし、今のうちにタブローにしておきたいと思った。

一方作品の大きさには団体展の大作主義に反撥を覚え、自分の身の丈に合った大きさで良いと考えてきた。しかし美術館の壁面は広く高く、私の考えが如何に甘いか昨年は痛い程思い知らされた。隅っこで萎縮したように佇む細い線刻の作品は傷ましく目に映った。

この一年とり分けこれから出品を続けていく上での諸々の事柄に想いが沈んだり、追い詰められたり、そして居直ったりが続いた。その結果ひとつの節目になった今年の作品で認められ正直、一息つけたと感じている。がまたこれが新たなスタート時点でもある。

自分の思うように自由に描きたいと思いつつ、何故かいつも反対に対象に捉えられてしまう。一つ一つ殻を脱いでいけたらどんなに伸びやかに表現できるだろう。精進しかないようだ。おわりにいつも手厳しいがあたたかく叱咤激励を下さる京都支部の先輩方に心より感謝申し上げます。

宮田啓子　「白山の華」

私はなぜ造形活動にたずさわるのか　善相原　昌　代

善相原昌代　　「室内」

「なぜ造形活動にたずさわるのか？ 自己の内的必然性について」このテーマでレポートを書くように課題が出たのは大学３年生の時でした。長々と書いたレポートの最後に『生のあかしとして、自己の生きざまとして作品を生み出していきたい』と、まとめました。

あれから33年経ちます。仕事と生活に追われ制作できていない時「全国公募Ｓ展に絵を出してみませんか？」と声をかけてくれたのは自由美術現会員の田内徳重氏でした。Ｓの会員になれたものの、Ｓの絵の傾向に疑問を感じている頃「自由美術協会に出しませんか？」と誘ってくれたのは川添正次郎氏でした。12年前に佳作賞をいただいた後のスランプの時、谷本重義氏に「そんな時もある。描いているうちにスカッと抜ける」と励まされました。私はこうして自由美術で出会った様々な人々に支えられてきました。

33年前に書いた造形活動への思いは今も変わりませんが、私の思いは徐々に欲張りになりました。必ず死があるという限定された人間としての仕事の中で、出来ることならば、死滅することのない生命を超えた精神としての作品を創り出したいと思うのです。今度こそ、今後こそは満足できる作品を制作したいと思いながら描くようになりました。今回の会員推薦を新たなスタートとして更に「今度こそは！」と思っています。

「縄で描く」　藤　田　和　子

40年も昔、捨てられていた段ボール箱と縄を拾って作品にしたことがある。精一杯背伸びして訳も分からず、より新しいものをと求めて仲間とやった展覧会。本当に若かった。そこでの経験がずっと私の心の底に残っている。自分の即興で作った作品が空間ごと自分に向かって迫ってきたのだ。それは、その頃熱心に描いていた絵画では味わうことが出来なかった感覚だった。

私は中学の教師をしていた30年間、ほとんど自分の作品らしいものを仕上げていない。しかし、あの時の感覚は縄と共にいつも私の中にあって、いつか平面で表現したい。何もしないで終わってはいとけないと感じていた。だから今の私はあの頃の宿題を片付けているようでもある。私がこだわっているのは縄そのものではなく、私の体の中にある縄から生み出される空気感なのである。

長いブランクがあったため、作品を人目にさらすことに憶病だった私だけれど、多くの方々に背中を押され、自分の感覚に正直に向き合えるようになってきた。これからも自分のペースで、がんこに、ずうずうしく描いていけたら幸いだと思う。

そして、宿題を終え、新しい世界が生まれたら良いなと思っている。

藤田和子　「縄 2807」

「私のかたち」

吉　崎　紀　子

吉崎紀子　「赤い線」

会員に推挙されたこと、それは思いがけないことでした。まだまだ私には無理があると思っていたから。それでも、うれしいことです。

16 年前、退職してすぐチベットへ旅をした。チベットの空・山・大地に魅了され、S40 号に仕上げた。そして、山口自由美術の研究会で「キャンバスの正方形が邪魔になるのだが…」と自評した。すると若い M さんが「それなら、ななめに掛けてみたら？」と。はっとした。これが「私の形」のはじまり。それから 14 年、こだわり続けた。山口自由美術の研究会では毎回「ななめ掛けの必然性」と問われ、反論できる確たるものはなかった。ただひたすら工夫し続けて来た。

自由美術展へは今回の入選で 16 回目になるが、私と自由美術のかかわりはおよそ半世紀ほどになる。山口自由美術ができた時、彫刻の伊藤先生に声をかけて頂き、なんとなく入会した。

教員をしながら、それでも山口自由美術展のために、なんとなく描いていた。そんな私が今日まで続けられたのは、良い先輩達に出会い、励まされ、導かれて来たおかげだと、ありがたく思う。そして会員にまでなることができ、皆様に感謝の思いでいっぱいです。

これからどう進むか、確たることはわからないが、自分を見失わず「今」を見つめて制作し続けたいと思う。

自由美術協会会員になって

水　上　里　美

自由美術との出会いは学生の頃、その当時教授であった八幡健二先生が所属されていた会という程の認識しかありませんでした。卒業後、富山に戻り、知り合いの薦めで自由美術に出品するようになりました。

水上里美　「囲む」

出品し始めた頃は入選したり落選したり、ある時は安井賞展の推薦を受けたり、それは今でも不思議な事だと思っています。そのことで、八幡先生にお電話したところ先生も御存じなくて、驚いていらっしゃいました。そのような風で５回程出品しましたが、その後、家庭の事情もあり東京の方へは出品しなくなりました。

10年間空白期間があり、再度出品するようになり10年余り、実をいうと当初会員になるとかそういう事は全く思考の中にありませんでした。しかし、今年、会員に推挙されたとの知らせを受け、やっとなったんだ、という気持ちでした。「これからは入選を気にせずに好きな絵が描けるね。」と会員の方より言葉を頂き、只今何を描こうかと思っているところです。

絵と自分

加木屋　　満

私が絵に興味をもつようになったきっかけは、小学生の頃わが家の応接間に掛けてあった２号の油絵でした。その絵には２個の桃が描かれていました。写実的ではなく絵筆のタッチを上手く生かして桃の表皮の特有の手触り感が伝わってくる作品でした。いつしか自分もこんな絵が描かれるようになりたいと思い、写実的な作品より触覚的な作品に興味をもち憧れるようになりました。

私の絵は、布ヤスリの上にコンテとクレヨン

で描いてあります。クレヨンは小学生時に使用したのみでしたが、ある日机の奥に眠っていたクレヨンを発見し、近くに置いてあった布ヤスリを試行的に紙代わりにしてなぐり描きをしてみました。するとザラッとした触覚的な柔らかいマチエールが生まれ、自分が求めていた感覚にしっくりきたことからこの画法を使って制作するようになりました。

４月に夫婦で九州を旅しました。別府から横断鉄道に乗り、阿蘇の内輪山を眺めながら熊本へ着きました。美しくそびえ立つ熊本城を見学したその夜、地震に見舞われました。体験したことのない激しい揺れが襲い、地震の恐ろしさをうえ付けられました。こういった自然現象だけでなく社会現象も含めて、今後予期せぬ何かが、良きにつけ悪しきにつけ起きてくるような「兆」を感じているのは私だけでしょうか……。

加木屋　満　　「兆１」

絵について

岸　川　理　子

私は、６歳の時、すでに油絵を描いていた10歳上の姉から絵についての講義を受けました。曰く「絵は見たまま描いてはならない。細部に拘わって、ちまちました絵を描いてはならない。空は青、木は緑、太陽は赤とか思い込みで描いてはならない。自然をよく観察してごらん。様々な色が混じりあっている」など。以後、小中学生時代は、この教えを守り、絵を描き続けました。面白いように各種賞状が舞い込み、喜びの中に過ごしました。が、高校の美術部に入る頃から、「絵を描く意味、芸術とは何か」を頻(しき)りに考えるようになりました。それが今に続く長い々々絵を描く昏迷の旅路の始まりです。絵を描くということは、あてどのない航海との思いが募る日々です。

「大きなホールでの演奏を前提とした現代のピアノは、音量においても音色の多彩さにおいても表現の可能性を飛躍的に押し広げた。しかし、音楽にとっても最も大切なカンタービレ(歌心)が犠牲になった」

「時代を超える音楽の本質は、メランコリー(憂鬱)やリリカル(叙情的)といったこまやかな感情にある」

(古楽の名匠　アンドレアス・シュタイアー)

このカンタービレを「絵心」と思い、長い旅路の羅針盤として、絵を描き続けたいと思います。

岸川理子　　「symphonie　xiii」

絵と私　私と自由美術

中　條　倫　子

中條倫子　「隣接する九つの円 2016」

絵画の制作は、子育てに似ているような気がする。良いと思ってやった事が、必ずしも良い方向に繋がるとは限らないし、正解がある訳でもない。自由に好きなようにできるにも関わらず、思い通りにいかず辛く感じる事さえある。けれども、思いもよらぬ所で幸福感に浸れる事もある。私にとって作品創りとは、責任を持って全力を注がなければならない子育てと同じ事なのだと思う。

2009 年初めて自由美術展を見に上京し、個性的な作品の数々や美しい展示の仕方を目にし、この会に参加し学びたいと強く思った。初入選以降は毎年研究会に参加し、多くの作品に対する会員の方々の丁寧な批評やアドバイスを拝聴し、様々な事を教わってきた。また、そのつど興味のある絵画展・写真展・好きな画家の個展等に足を運び、素晴らしい芸術を観る機会を得た。自由美術には感謝の気持ちが大きい。

近年は、物を見て形を探究し好きな形の円を多用して構成する絵にも取り組んでいる。引き続きご指導を頂いて、今後も自分らしい作品創りに励みたい。

人間賛美

山　田　哲　夫

青天の霹靂　会員推挙と佳作賞の連絡を頂いた時の思いです。現役時代､様々な問題を抱え、画業にあまり力を入れることができず、数回の個展と幾つかのグループ展に参加したのみで、後悔の日々が続きました。退職数年前から一念発起、何か一本に絞って制作しようと、小さなエッチングプレス機を手に入れました。

絵を描くだけでなく、その絵を分解して版を造り、これまた微妙な作業の刷りという制作工程の長い版画は、これまでの自分には無い生き方ではないかと考えついたのです。

浜口陽三のカラーメゾチントに興味をもって

山田哲夫　「魚になったブシュヌ神インド神話より」

いたこともあり、彼の作品を目標にしようと、彼の作品に独自なものを入れて制作活動をしたいと独学ながら本格的にメゾチントの制作を始めました。

その主たるテーマは「人間賛美」単なる自然の美しさではなく過去の人間たちの「行為としての美」現代の科学でさえ解明できない偉大な創造物です。それらが一旦表世界から消えて、近代になって発見されたり、見直されたりして現代に出現してきたものです。過去の世界で輝いていた創造物が再び現代の世界で脚光を浴び輝いています。私は彼らを探して旅をすることが多いです。

今後も彼らとその精神文化を融合させて作品制作をしていきたいと思っています。

秋に想う

元藤郁子

元藤郁子　「古城（No.3)」

長い間出品を続けて参りましたが、この度のお知らせを受け、今後共、絵を描き続けてゆく励みとして行きたいと思っております。

私は、学生時代から油絵を制作してきましたが、ある時期にシルクスクリーンを学ぶチャンスを得､以来その魅力にはまってしまいました。

油絵等は、一般に「一」から完成の「十」に向かって一筆づつプラスして積み上げて行く「足し算」ですが、版画はその逆で、ある程度完成した「十」を分解して逆算し､「引き算」して完成に向かうという、油絵等の制作とは全く逆転の発想と過程が面白く、又難しいのですが、その両方の手法と発想を合体して、なんとか独自の世界を生み出してゆけないかと暗中模索している毎日です。

何を描きたいか、そしてそれをどこ迄表現する事が出来るか、終わりの無い世界ですが、苦しみの中にも楽しみを見い出して行きたいと思っています。

ひとりごと

松山由美子

2007年から出品して10年目での会員推挙、背筋がピンとなりました。私は、夜の食事のかたづけを終わらした後(だいたい9時頃です)台所でキャンバスに向かい、やさしい風、強い風、おだやかな風、朝早く感じた風を見つけながらの作品作りです。線を引き、重ね、色を置く、うしろにさがって形をながめ、また重ねたり、消したりの繰り返しです。風にこだわっているので、まわりの人達の中には「他の作風にしたら。」とか「この色であきないの」と言う人もいます。私は書いていておもしろいので「そんなことない、あきないわ。」と言っています。じっと見ていると、キャンバスの中に風だけでなく何かが見えてくるのです。(うさぎとか猫

松山由美子　「風 A」

とか竜とか、他の動物の目とかなどです。）それも楽しいのです。もっといろいろ研究しないといけないとおもうのですが……。

何人かの先生達に「これからは思い切り描けるね。」「いろんな事ができるね。」など言われましたが、私は色が淡い色で書いているので強さを出すにはどうすればいいのか、いつも悩みます。色もふやすと全体のバランスがくずれてしまいそうで、なかなか思い切って出来ません。今ある色で濃淡の深さや形の流れをどう表わしたらいいのか。これからの私の課題だと思います。

描き続ける事

岡　野　修　己

突然の退職により、「毎日が日曜日」となる。心の準備のないまま、身体の多少の不自由さ、そして開放感の中、第三の人生に突入してしまった。その突然おとずれた時間の中で描いた作品が評価され、「バンザイ！」と叫びたい心境。ほぼ毎日、キャンバスに向かう生活。こんな日常にあこがれていたんだ！と心赴くまま、描く。ゆったりと描く。

テーマ「眠れない宙」に向かっていると、自分は存在するのか、無なのか、進んでいるのか、止まっているのか、叫んでいるのか、黙りこんでいるのか、誰か、そばにいるのか、いないのか。

閉じていた感覚や、忘れていた記憶が、ずるずると、引きずり出されていく。そうしてキャンバスと、対話しながら、今日も描く。

さて、伝統ある自由美術協会の会員に推挙され、じわじわと、その重さを実感。

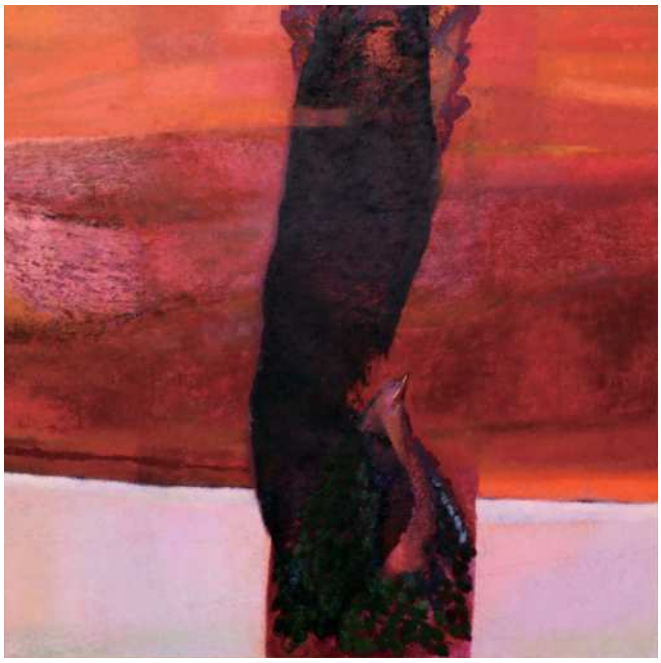
日々の暮らしを、ていねいに、そして描き続ける事が、私の元気の源となっている。

それにしても、釧路の冬は厳しい。外で描くのは……。年々。

「風景が私の中で考える
　私は風景の意識なのだ」
　－セザンヌ－

岡野修己　「眠れない宙、1」

加　藤　　絢



「ルン（風）」

新　会　員

杉　崎　一　枝

友人の絵を見に行き、仲間入りしたくて、自由美術に出品しました。そして、10年。展示される自分の絵は何とも、嬉し恥ずかし！ でも、研究会他、折々に頂く先生方、先輩方の御意見、暖かいアドバイスは、的確で、大変参考になり有難く思っております。

この度、新会員に推挙頂いたのも、皆様のお陰と心からお礼を申し上げます。

ハシビロコウという鳥を、描いてます。その出会いは、十数年前。彼らは、動物園の大きなケージの中で、フラミンゴなどと一緒でした。ある時、見ているとピンクの集団が、右往左往に揺れています。大きな鳥が脅かしている様です。ハシビロコウでした。遊んでいたのでしょうか、面白くて、カメラを向けた所、いきなりバッサバッサと飛んで来て、私の目の前20cmにスックと立ったのです。まるでモデルの様に。ビックリ仰天、のけぞりながらシャッターを押

杉崎一枝　「泡玉・虹玉・光の輪」

して、後日それを絵にしました。以来、描き続けている訳です。

ハシビロコウは、今では個室を与えられ、動かない鳥として、超人気者になっています。ケージの前では、いつも沢山の笑顔が集まっています。結構色々動くので、見物人は大喜び、平和で楽しい光景があります。私は、そんな平和が、長く続く事を願って、絵を描いているのかも知れません。

新会員になって

長　門　ふみ子

長門ふみ子
「屹然」

この度は会員推挙戴きまして、有り難う御座います。記念すべき 80 年にあたり群馬研究会の方には、作品の批評指導をしていただき本当に有り難う御座いました。実は急に帯状疹の中で顔面マヒになり 10 日入院、退院してからが大変でした。フラフラして足が浮いている様でした。今年で 6 年たって快復しています。この時に新会員に成って嬉しい病気にならない様にこれから少しでも前進しもっともっと描いていきたい、よろしくお願いします。

イチジクもソラマメも

丸　山　栄美子

イチジク、縦割りしても横にスライスしても美しい。つぶつぶのピンクのバリエーションが広がっている。それが軸にかけてもひだを帯びて伸びている。

それからソラマメ。ゆりかごの中に守られて眠っている。新しい芽もちょこんと見えている。その写生から始まって、X年余り。

2011 年の 3 月 11 日直後の油絵の授業を今も思い出す。たくさんの命が失われた。

絵のどこかに生命を感じながら、制作したいと思っている。

丸山栄美子　「赤・青・黄の中に」

デザインとは違う、おはなしをつくる、かんがえてはだめ。いろいろ頭の中をめぐり、けれどもやはり考える。

デッサンによく取り組み、さらなる向上を目指していければと願っています。

ちなみにイチジクもソラマメもどちらも食べるのも好きです。

感　謝

鶴　巻　加　代

第80回自由美術展で、会員に推挙頂き有難とうございました。

驚き、始めにしたのは、初入選からの自由美術誌を読む事でした。赤ペン辞書を横にいつもですが、序々に心が落着きました。以前赤く引いた所が今は違っていたり…何倍も考え込んだり…まだ難しく分からない事が多いですが、20年間で少しは成長できたのか？ 変化できたのか？ と問いました。

私のことですが－ 亡き両親、祖父母も絵が好きでした。両親のアルバムに結婚前後の絵があり戦地から交した絵葉書もありました。そして、小学校の先生が絵が好きで楽しく時間内に終えない時もゆっくり待って下さいました。日記の習慣もその頃で内向的だった私は絵が好きになりました。中学・高校の美術の先生にも声をかけて頂き、今、途切れそうな線でしたが描き続けて来られたのは、子供時代の両親、先生方のお陰と感謝を致します。自由美術との出会いは、33才の時父が病で急死し夢中で描いていた日々、新しい引越の地で自由美術の飯田春行先生の市民講座がありました。新潟自由美術の先生方の情熱と厳しさを知り前を向く事ができました。多く感謝です。

鶴巻加代　「BE・ALL（母に捧ぐ）－ 2016」

私は又、幼いですが日記を続け感じやすく消化下手な自身を表現してゆこうと思っています。頂いた会員推挙の大きい点を大切に、－今のままではいけない。でも大丈夫－。と誓っています。

美術との出会い

辻　　忍

小学生のとき、はじめて縄文土器を手にした。

そのころの僕は、美術も絵を描くことも苦手だった。でも、なぜか太古のものには強く引かれていた。とくに好きだった場所は博物館。気に入った遺物があると、薄気味悪いものですら、すぐにでも持ち帰りたくなり困ったことを今でも思い出す。

その縄文土器は、一度も足を踏み入れたこと

辻　忍「あかりにちかく」「ひかりに沿う」「風行」

の無い少し傾斜した高台で見つけた。自宅から自転車で一時間ほど離れた、日当たりのいい草むらだ。それを拾い上げ手のひらにのせたとき、なぜか太古の人に直接触れたような、不思議な感覚が伝わってきた。人が作ったものとしての存在感を、時間や場所を超えて心の中で受け止めた感じだった。

それまで、太古の世界は遥か遠く、暗い地中に眠っているものと思っていた。ところがその場所は思いがけず近くにあった。土器を手にしたときの心地よさは、心の中で何かが変化してゆくきっかけになったようだ。

今年、想像もしていなかった新会員に推挙された。あまり多くの人とかかわらずに制作を続けてきた僕にとっては戸惑いもある。ただ、何かのご縁のおかげなのだろう。縄文土器との出会いがそうだったように、少しずつおきる心の変化が、日々続けている制作の糧になり、力づけてくれることになればと思う。

生命力の表現をめざして

佐　藤　和　夫

この度の会員推挙を受け改めて創作の思いを一層強くしました。私は初め二紀会に２年ほど出品をしていたのですが、隣り合わせの自由美術の展覧会場にある、個性豊かで、主張がはっきりしている作品群をみて、すっかりその虜になりました。そして自由美術秋田の創立者で中学校時代の恩師でもある洋画の池内茂吉先生にお願いをし、１年後出品しました。当時秋田の彫刻部の会員は千葉精一氏、いろいろと指導を仰ぎました。さらに、その後秋田で自由美術具象作家による５人展（千葉精一、木内岬、鈴木徹、垣内治雄、佐山道知の各氏）が開かれた折に、皆さんの彫刻にかける熱い思いにふれ、この会で制作活動をしていこうと一層強く決意した次第です。平成19年に自由秋田の作家研究会で、私が取り上げられ、今までの制作を振り返る機会がありました。その折の一文です。「私の創作の源は人間の在り方に対する自分なりの思いである。なぜそこにその人間が存在するのか、流れゆく時間を通してひと時考えてみることである。」ここ十年は初心に帰ったつもりで、モデルを使っての全身像の制作を行って来ました。それゆえモデルに寄り掛かった表現に陥りやすく弱い表現になりやすいことが毎回の反省点です。人間性による生命力の表現をめざし、これからも日々制作に励んでいきたいと思っています。

佐藤和夫　「座像」

受賞者の紹介

自由美術賞を受けて

自由美術賞　渡　邉　知　平

「月へ」

美大を出て、４・５年ほどして、最初に作品らしいものを造ったのは、板を使った作品で、それも金が無いので一番安い建築材で屋根瓦の下地に使う野地板で箱や大きなパネルを造り、本来なら自立出来ない様な形体を、なんとか工夫して自立させる、その工夫が面白い造形となった。

その後グループ展の仲間と長野県の木彫シンポジュームに参加した折に、近くに大理石の屑石が貰える山が有ると聞き、掘り出された手頃の石を貰い受け、シンポジュームには鉄板とバーナーを持参していたので、バーナーを使い、鉄板をコンクリー用のビスで大理石に直に止めながら、石を鉄板で覆うことが出来た。これは自分でも面白い作品になった。後に、友人に誘われ、あるコンクールに出品し賞を頂く、しばらく鉄を使った多少強引な作品を作る。

ガラス、子供の頃の体験した記憶を元にガラスを使った作品を作り始める、今度は廃材で造った人体をガラスで覆う、面取りの人体と云うか、三角形にカットされた、ガラス板を多面体に組み上げ強引にガラスで覆いつくす。この頃より作品の素材が多岐にわたり、木、鉄、ガラス、アクリル、布、水、石、漆、金箔も使い、なにものにも捕らわれずに自由に製作して来た。世界を感じ、想像した。頭の中のイメージを、現実の空間に存在させる、そこには迷いや不安や苦しみも有るが、頭の中に在るものが、具体として目の前に組み上げる喜びは、製作に常に伴う苦しみより勝ってました。しかし年々、その喜びは苦しみと拮抗し、ここ数年は迷いや不安が大きく、発表後に後悔すら覚えることも。

そんな折、今回の出品作が自由美術賞を頂き、迷いや不安を少し軽減され、有り難く思います。

しかし大事なのは、その迷いや不安なのだと想うのです。

靉光賞を受賞して

靉光賞　伊　藤　雄　人

「破壊と再生」

そのとき、ある種の戸惑いと、若干の距離感の狭間に漂う無数の記憶の中で、私は途方にくれていたのではないでしょうか。

絵を描き始めて半世紀五十年あまり。自由美術展に初出品してから二十年。時に迷い、時に優越感に浸り、朧な地平線に映ずる明日の姿に、あるいは自の拙さに恥じ、打ちひしがれる眠りにもかかわらず、絵は私の側に寄り添い続け、その道にしか幸福はなかったと思います。

かつて同世代の若者達の反抗が、世界に連鎖し、自由を謳う大きな奔流となった六十年代後半、自分も怒れる若者の一人として活動ではなく、表現者として絵画の世界に入っていきました。

自由美術展では入選から後、幸運にも佳作賞、新人賞と選出して頂きました。けれど時代の波とともに私の画境は変化し、具象、抽象はたまたシュールの世界の間で、いつもさ迷うばかり……にもかかわらず非具象、非抽象という非在の領域に、我が魂を飛翔させようと……。

＜破壊と再生＞受賞作で伊藤雄人は何を破壊し、何を再生しようとしていたのか。浮遊する有機体、対立する四次元世界、化石の大地に根差した混沌と静寂、破壊を夢想する空の下の構築物、重層的記憶と時の拮抗……。その答えはいまだ見出せずいる。

敬愛する靉光の名を冠したこの賞は、この破壊する勇気に大方は与えられたと受け止めたい。

まことに光栄なことてあり、ご推挙を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

「平和賞」受賞しての喜び

平和賞　仲　　隆　三

「憤」

高等学校で美術の教員をしていた当時、自由美術協会の理念に共感し出展を続けておりましたが、このたび82歳にして初めて平和賞をいただき、大変名誉なことだと心から感謝いたしております。

私は、３年ほど前に脳梗塞を患い、また昨年３月には腰椎圧迫骨折により入院、現在は老健施設に入所してリハビリに励んでおります。

今回出展した作品は、入院中に構想を練り、自宅に何度か帰りながら短期間で完成させました。

以前から「鷹」を描き続けてきましたが、この作品は鷹の顔をより抽象化して描き、濃淡をはっきりさせました。青と赤そして黄色はテーマである「憤り」を表しています。

家族が「自由美術協会のホームページから作品が見られるよ。」と言って、私の受賞作を印刷してきてくれました。パソコンを使うと全国どこからでも私の作品を見ることができるとは、ＩＴには全く疎い私にとっては驚きの一言です。

身体は多少不自由となり、描ける作品数もすっかり減ってしまいましたが、絵に対する情熱は変わらず、体調がいい時にはスケッチブックに向かいペンを走らせつつ、来年も気力の続く限り出展したいと考えながら心静かに過ごしております。

虫たち

平和賞　坂　口　利　夫

「だまし絵」

人の世は、戦争・犯罪・差別・貧困……と生きにくいが、虫の世界も開発などで棲息地を奪われ、狭小し、農薬を撒かれて土壌は汚染され種は激減し、まことに生きにくい。しかし、媒介するハチなど、昆虫が農業にもたらす大きな利益や、昆虫食が世界を救う？アジア・アフリカを中心に約12億人が昆虫を食べているとか、化学物質が蓄積されやすいトンボを使っての汚染の広がりを調べる「トンボ調査」があり、また昆虫の特性や機能・デザイン・性質を活かした先端技術の開発など、昆虫の世界は人間に役立つ知恵の宝庫だともいえ、産業や農業の分野に限らず、広く注目を集めてもいるのです。

我が家の近くに減反政策で耕作放棄された水田が、荒地となって、今は雑草に被われている場所があります。周囲は雑木林、真中辺を小さな川が流れる「谷津」と呼ばれる里地で、広さは500平方メートル位、そこが虫たちの今は棲息の場となっています。その狭地で、昆虫の定点採集をし、1,000種位、標本箱で20箱、とても自慢できる数ではないが、絵の素材としては充分な数です。10代の後半、奥秩父の雲取山で偶然アサギマダラを採り、以来、昆虫たちの色彩の美しさ、緻密な形、自然の営み……に魅かれ、そして何時の間にか私の絵の素材の大切な一部ともなっているわけです。男性より女性のほうが虫が苦手だとか、虫たちにも好かれる虫と嫌われる虫があり、人の世界と同じ差別もある。虫に触われない、苦手な大人もいます。虫の生きられない世界は、人間も生きにくい。この機会に、ほんの少しでも虫に興味をもってもらえれば、これほどうれしいことはありません。

絵を画くことより、虫を観ているほうが好きな私に、平和賞。ありがとうございました。

新 人 賞

'16年受賞者による新人賞展は'17年10月4日（水）～10月16日（月）
国立新美術館（自由美術81回展と同時開催）

新人賞　宮下　光子　「変身」

新人賞　辻本　又慶「歌う人（のど仏）」

新人賞　吉崎　紀子　「赤い線」

新人賞　辻忍「あかりにちかく」「ひかりに沿う」「風行」

佳 作 賞

'16年受賞者による佳作賞展は'17年4月11日（火）～16日（日）
PAROS GALLERY（大森）

佳作賞　阿久津　隆　「遺伝子突然変異」

佳作賞　山田　哲夫　「魚になったブシュヌ神」（インド神話より）

佳作賞　五十嵐久美子　「ケイニムカッテ」

佳作賞　中西　保裕　「想」

佳作賞　田中　敬子　「風と虹の杜」

佳作賞　辻本　又慶　「歌う人（のど仏）」

佳作賞　阪田　均　「モンスター IN ワンダーランド」

2015年 新人賞展を見て（`16本展と同時開催）

「竹越さんの空そして木々のカタチについて」

國　定　正　彦

「伸びるⅠ」

「木々のカタチⅠ」

「伸びるⅡ」

私は竹越さんの事を良く知りません。

作品を見たのも何年前か、よく覚えていません。

ただ、初めて見た時の作品の印象は今でも良く覚えています。

青空と一つになる事を望んでいる様な嫋やかな雲、秘密の場所からの密かな香りをのせたゆるやかな風が木立を抜け傍観者に囁きかけてきそうな、何とも言えぬ透明な空気感を漂わせていました。

そして、その後の作品も青空と木立をモチーフにした仕事は終始一貫しています。それは拘わりなのか、描かなくてはならない使命なのか、どの様な経緯であの仕事に辿り着いたのかは全くわかりません。ただ私にはあの作品はそれらを明らかにする事自体を拒否している様にも見えるのです。それはまるで秘密の世界観への結界の様な感じがしています。若しくは不思議な国への入り口、今生と彼岸の界の様でもあります。その観点で見てみると、ジム・ダイソの作品の中の「gate」を連想してしまいます。(添付写真を参照)

空と木立だけのシンプルな構成にも関わらず秘密の聖域感を放出とさせるのは、太古から変わらず続いている二つの要素が待っている普遍性が、我々の中に今も住んでいる太古のアニミズムの記憶を刺激しているからでは無いでしょうか。天に届きそうなその細い枝先は先人たちの神に対しての祈りを連想することができます。

以前、岡本太郎氏の写真集で沖縄久高島の大御嶽の神の降りる聖地を見たことがありますが、それは何の変哲もない木立の中の小さな広場でした。その中で岡本氏は「本来神は何の変

ジム・ダイソ　「gate」

哲も無い場所に降りて来て透明な空気の中で人と向き合う」と言っています。竹越さんの作品はそう言う事を感じさせる作品ではないでしょうか。

彼女の作品でもう一つ印象的なのは、木立や枝のフォルムだと思うのです。大変に線が活躍しており、それが独特の作風にしていると思います。

そして、私感ですが最近の印象としては、その線の動きを繰り返し見て行くと、「これはもはや写実ではない」という印象に変わってきています。

今後このテーマや線がどの様に変容し又、変貌してゆくのか、みなさん是非竹越さんの作品に注目していただきたいと思います。

創っていく人でありたい……吉田朱里の仕事

吉　見　　博

「かんがえるコト」

「ノゾンダ代償」

「かんがえるコト」F100号。前年の新人賞作である。

画面は、中心になる人体らしき形態とその周辺が不思議な形で埋め尽くされている。主調色の紺色は深く、明部と暗部の形を決定する。全体は平面的に扱われていて、人体のフォルムの内部には、海底に揺らぐ密生した無数の胞子や海藻のような有機的な形が漂う。人体の形を吊り下げるかのような帯状の形や、下部の尖った葉の重なりのようにも見える魂も、この絵全体の内と外の形態として関連付けられ往還していて目の動きを誘い魅力的だ。多分、非常に感覚的に浮かび上がってきた結果の画面なのだろう。

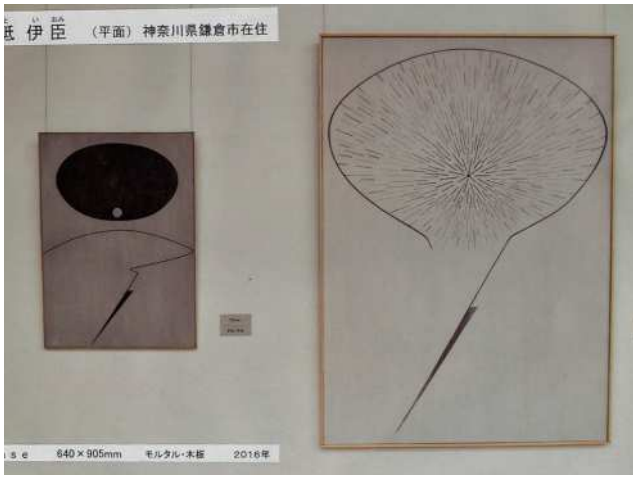
さて、新作「ノゾンダ代償」P80号はどうだろう。全体はややクリーム色がかった平面だ。中央に大きく人体が線描されている。歪んだ顔、

大きなリングの連鎖、膨らんだ腹部、足に絡みつく毛髪、蓮の花のような植物……それぞれ意味もあり、物語りもあるのだろう。第８室にも大作「コウキシン」が展示されていて、作者の独自の発想が伺える。しかしながら、これらには受賞作の持つ不思議な形態はなく、事柄の説明に引き摺られてしまったようで少し残念だ。体質的に、感覚的に－それらを持っていること自体は素晴らしい武器なのだけれど－前作の、白と黒にも置き換えられるようなコンストラクションが生まれていれば、説得力は増す。

吉田さんは、むしろ他ジャンルの陶芸を学んできて、その後この２、３年に絵と向き合うようになってきたという 20 歳代の女性だ。下描きなしに、アクリル＋オイルパステルを塗り重ね削り取っていくという技法は、幼い少女の頃にクレパスで色を重ねて引っ掻いて、夜空の花火を浮かび上がらせた時の、わくわくした発見から始まっている。これからも出来不出来はあるとしても、注目していきたいものだ。ちなみに、もう一人の新人賞作家、青砥伊臣さんも Self Taught Artist だという。その意味でもこの若い作家たちには「自由美術」に新しい何かを付け加えてほしいと切に思う。

青砥伊臣さんの作品　－新人賞展より－

田　中　秀　樹



「Phase」　　「モルタルの海市」

「Phase」　「Phase」　「Phase」

第一印象として、そのきわめてマットな画面に好感を持った。余計なものを極力排して、必要最低限のフォルムのみを残したその画面によくマッチしている。フォルムも厳選されている。描画材にモルタルを使用しているということであるが、それもおそらく正解であろう。作者の強いイメージが感じられる世界であるが、そのイメージに向けて様々な素材を繰り返してみた結果であろうか。おそらく油彩等の絵の具の類ではあのような感触は出せないと思われる。

一見淡々とした作品に見えるが、しかし制作上は困難の連続であろうかと想像される。正直、制作の過程はよく分からない。しかし少なくとも油彩画のように描いたり消したりを繰り返すといったことはおよそできそうにない。失敗したときは一からやり直すといったことになるの

だろうか。いずれにせよ綿密なイメージ作りと、周到な制作過程が必要とされるに違いない。きわめて単純化された画面、それに伴って生まれる線一本、形一つのもつ重み……。線がわずかにずれるだけで印象が変わってしまう可能性が高い。またその線の質も作品に大きく影響するであろう。場合によっては非常に間の抜けた画面になってしまうこともあるかもしれない。自分のイメージを保ちながらシャープなフォルムをどこまで描き出せるか、またそれを画面の中でどこまで生かせるか……。大きくとられた面の張り、緊張感、そこを損なわずに制作を進める困難さ……。画面の充実感を高める苦労と努力は大変なものであると思われる。しかしそれだけに納得のいく作品を仕上げたときの喜びは大きなものであるかもしれない。

今後どのような形が現れ、どのような世界が展開されていくのか楽しみである。

山崎　史さんの作品評

岡　村　光　哲

山崎氏は自由美術に出品されたのはごく最近です。しかしながらその力量、経験はだれもが認めるところです。新人賞という言葉が当てはまらないかもしれませんが、ひとりの作家の作品として、私なりの解釈を書かせて頂くことにしました。

新人賞展には二点の作品を出品されました。(apples 2 と speaker) apples 2 は陶、木が素材です。陶の作品を観た時、やきものの還元という言葉を思い出しました。その言葉に氏が創りだそうとする－かたち－の原点があるように感じられたからです。

空気中には 20％の酸素があり、酸素は有機物を燃焼させてすべてのエネルギーを作ります。やきものの窯の中でも燃料をもやすことで、土や釉薬の鉄分などが変化していきます。それは窯という箱の中で無酸素状態から新たな世界が生まれるのです。apples (りんご) も窯の中で焼かれ生まれてきた物です。黒く焼かれた姿は炭素化し " りんご " という形の記憶を封印されたかのように感じられます。そこにはある一種の時間の止まった静寂性に包まれた世界が展

開されているようです。

speakerは黒大理石の作品です。地球上で貴重な黒大理石ができるまでにどれだけの－時－が過ぎたか計り知れません。この作品は前者のapplesは反対に過ぎ去った－時－の声を聞き取ろうとするかのようです。

山崎氏の作品に流れているコンセプトはこの－時間－だと私は感じています。それはだれも止める事の出来ないものです。しかしながら、ほんの一瞬、作品のなかに封印することができれば……。

作品のなかに流れる張りつめる静かさはここにあるのではないでしょうか。

展 覧 会 より

手島邦夫展「冬の旅」

千駄木画廊　2016. 11

加　藤　義　雄

「冬の旅」

たとえば「冬の旅」というタイトルからして、すぐ想い浮かべるのはシューベルトの歌曲集であろう。だがそのロマンチックな響きと今回出品作「冬の旅」との大きな違和感はなんなのだろうかと思った。ここに手島邦夫という謎に迫るカギがありそうだ。

私の記憶が確かならば、手島さんがU展の何回かの特別展示以外で、まとまった展示を画廊でみせるのは初めてである。今、酒も飲めない体調のなかでの個展である。おそらく先輩、仲間が次々と旅立つ昨日今日を見るにつれ、彼の覚悟は固まったと思える。

入口の部屋の軽妙なドローイングが魅力的だ。毎日日記のようにしたためた作品は、「夜ごと到達することない長い非常階段を意味なく駆け降りる夢を執拗に繰り返し見る。明日の晩

はどうか違う夢をみたいものだと思いながら筆を走らす」と彼は語る。そして「その階段はボロボロに錆び付き、ところどころ途切れ、飛び降りるしかなく何回か目には疲れきって目が覚めるのだ」と私の夢も付け足そう。

大作は力作ぞろいだ。そのなかでも先の「冬の旅」が自分は最も興味を引いた。トヨタ自動車のマークが上部に２つ入っている。４、５本のエンジンが絶え間なく上下している。真ん中半分で下のエンジンは上に這い上がれない仕組みになっている。雲が流れる。トヨタのマークが光る。菊のマークの比ではない。日本の構造がみえ隠れする。色彩も強く表現されている。大企業に保護されない私達絵描きたちの「冬の旅」はエンエンと続く。言葉というものは不思議なものだ。多くのものを語るがまた多くのものを隠すものでもあるのだ。作者の思いと観る者との相違は面白いものだといつも思う。

突然だが、先日 NHKBS で「U ポート」という古いドイツ映画を見た。第２次世界大戦で劣勢になったドイツの潜水艦が狭いジブラルタル海峡を抜けて帰港する話である。その潜水艦の狭いなかを兵士は油まみれ、傷だらけになって知力体力の限り働く。エンジンも必死に上下する。鉄という素材で固められた狭い空間。あくどい赤色ランプ、異臭がただよう。そして長い「冬の旅」は脱出に成功して帰港。手を握り、抱き合ったところで連合軍の空爆で全員死ぬ。

旧作で題名は忘れたが２人の人物を組み合わせた 15 号くらいの作品がいい。静かな絵である。詩情があるというか、はにかみ屋の彼の生き様がすけてみえる。この作品は大事にしているという。

吉野山　峯の白雪　踏み分けて
　入りにし人の　あとぞ恋しき
（静御前）

追　悼

川上十郎さんありがとうございました。

窪　田　旦　佳

「そして、生きものたちは…」

川上十郎さんの急逝の報を聞いて、一瞬耳を疑った。新美術館でお会いしたのは、つい最近のことで、お元気そうに話をされていたのを思い出したからである。確かに足は不自由で杖をついておられ、ご子息が車で待っているからと早々にお帰りになったのを知り、大きな体軀を支えられる足への負担が大きいのだろうと思っていた。その後こんなに早くおなくなりになったとは信じられなかったが事実であると知らされ残念でならない。

川上さんは活動的な方で、次々と大作を発表されておられた。一方で単行本や新聞の連載小説のさし絵を数多く描かれ、親しみのもてるタッチで好評だったと思われる。

1962年には、ヘルシンキ世界青年学生友好祭に自由美術から参加されている。この年は私が自由美術展に初出品した年なので記憶に残っている。川上さんはその後世界各地へ旅をされ、ご自分でもヨーロッパ旅行のツアーを企画され、美術旅行を主催されていた。どのツアーも旅行会社のツアーとは一味違った写生地のスケッチと、美術館の旅だったようである。私は残念ながら参加できなかったが、参加された自由美術関係の方々の話から貴重で楽しい旅だったようである。

川上さんは筆まめな方でもあって、はがきを頂いたり、ご自身の若い頃の体験やその時の感想などを記された文章を送って下さった。学徒勤労動員で軍需工場などに動員され、汗まみれで海軍の爆撃機や兵器を造った体験が臨場感あふれる文章で綴られていた。その時代の苦しくつらい体験が、後の反戦の思いや平和を願う心をはぐくみ、川上さんの絵画作品の根幹をなすバックボーンになっているのだと思われる。ひ

とたび戦争になれば、日常の生活は破壊され、絵などは描けない状況が続いてしまう。九条美術会の発起人としての活動もこうした平和への強い意志の表現の一つであったと思われる。

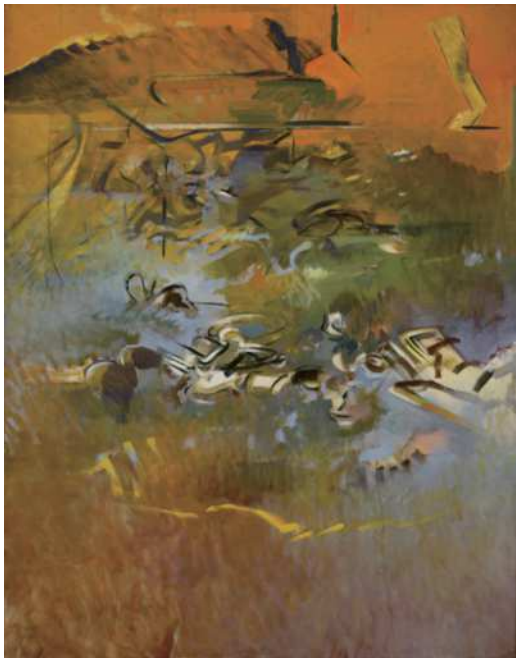
近年の作品は、「生きものたち」をテーマに虫たちを多く描いてこられた。一見すると抽象画のように見えるが、題名の通り虫を描いた作品であった。どの作品も以前のような多彩な色のはなやかさはないが、グリーンや褐色の同系色を透明感のある美しい色の階調を駆使して、潤いのある深い色調を生かした複雑な絵画空間を提示されていた。

2013年「虫類戯画」、2014年「埋もれたいきもの」、2015年「怒るいきものたちは」、2016年「そして生きものたちは」の作品群は、川上さんが絵画作品によって伝えたいメッセージがぎっしりとつまっているように思えてくる。虫たちの姿を人間たちに置きかえて見えてくるようにも思われる。

川上さんが残して下さった有形無形の多くの遺産に学び、少しでも継承して行ければと思う。川上さんありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

久　田　弘　氏

関　正　和



「風景」

大勢、集まった時に、性格のことが話題になったことがある。

私が、久田氏程頑固で偏屈な性格は珍しい。例えば、農家の庭先で坐って仕事をしている爺さんに誰かが何か尋ねたとする。すると、おやじは返事もしないでじろりと上目遣いにジロリと見て返事もしない。それが、久田氏だというと、皆んな久田氏の方を見ないで全員が私の方を黙って見ていたのには驚いた。軽はずみにひとのことはいえないものだ。

実は、久田氏は一見愛想ないように見えるが交際ってみるととてもあたたかい性格だということがわかってくる。外国へも同行したことがあったが、自分を犠牲にしても相手のことを大切にするのを何回も経験した。

久田氏の言葉で、印象に残っていることがある。いつか、彼に聞いたことがある。「日本の画家は、(日本画家に限らないが) 東洋の古典などを見て、自分の作品の不備に気づかないのだろうか。」彼の答えは明確で一言でいい切っている。自分では、同等、又はそれ以上だと思っているのじゃないか。

田守正道氏を悼む

二度会員になった同世代人

吉　見　敏　治

「老牛」

田守正道氏とは、大阪支部で、もっともかかわりあいの深かった友人である。

引き留めるのを振り切り、四十数年前に一度は退会、十数年を経て念願の会員復帰。最初何のための退会だったのかと、訝ったものである。

あの絵は誰もの記憶のなかにあると思う。一度見たら忘れられない重厚さで、一口では表現できないが、積み重ねられた絵具の層……前年描いた出品作の上に、さらに塗り重ねていくのだが、下層の絵具が乾いておらず、新しい出品作の表面は外枠（仮櫞）より盛り上がっていることもしばしば。そのため会員審査の折には、他の作品に、乾いていない絵具がくっついて苦情がきたこともあった。絵を運ぶ人の手に付くこともあって審査室に入れてもらえなかった年もある。また、巡回展開催時に、彼は展示場所を自ら決めていた。ただ々重くて、鑑賞者の子供連れの人たちがくると倒れて下敷きにならないかが気になって、ワイヤーで固定し壁にもたれかけたことも再三あった。その彼の出品作も近年は小振りになり、以前のような心配がなくなってくる。

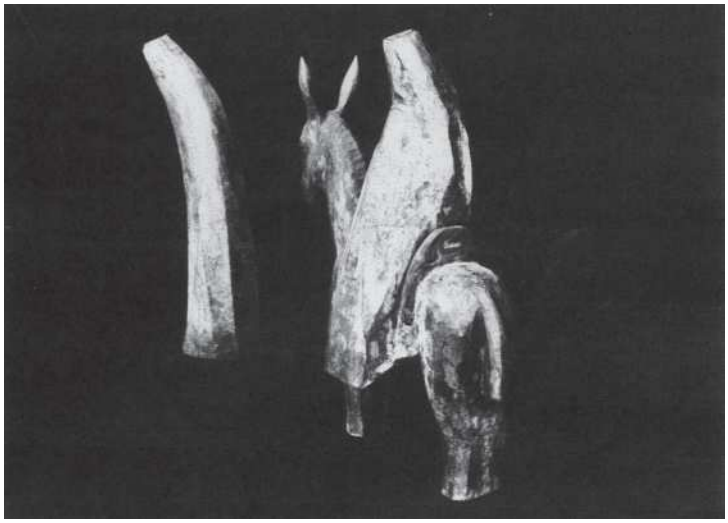
しかし、作風は頑として変えることはなかった。常に自由美術展の会場の一角で存在感を示していたと思う。

私とは同い年、しかも会内では一番長く付き合ってきた一人だったのに……。

突如、ひと足先に黄泉のくにへと旅立ってしまった。あの煩い男と切れて清々しているかも知れないが……。合掌

米坂ビデノリさんと木彫

中　嶋　一　雄



「間道を行く」

釧路の彫刻家、米坂さんが四月一日、八十二才の生涯を閉じられた。まだまだ削り続けたかったろうに残念です。

中学二年のとき画家志望だった頃「みずゑ」で松本竣介の「運河風景」に出会い、一九四七年当時、自由美術協会には井上長三郎、鶴岡政男といったそうそうたるメンバーがいて自由美術の存在を知る。一九五三年芸大は油絵科にくらべ競争率の低い彫刻科の菊池一雄教室を選び、作品の発表は自由美術とすることにためらいはなかった。学生時代から出品し、一九六一年芸大卒業の年会員に推挙される。当時、彫刻界はイタリヤ彫刻のグレコ、マンズー、マリーニ、マスケリーニ等々の作品が紹介され、公募団体も活気づき、また野外展も盛んに開催される様になる。東京にとどまり仕事をしたいと考えましたが、社会は不況の時代で就職は見つからず、北海道へ帰ることになった。

学生時代に粘土で習い覚えた技法が、土も石膏もないところでは腕の振いようがなく、ヘラも芯棒も埃にまみれたままであった。

厳寒の二月、先住民の青年床ヌブリが、直径一尺五寸の丸太を半割にした三尺ばかりの梠の木に、荒縄かけて雪道を曳いて来て、「面白いから彫ってみろ」その言葉からすべてがはじまる。

この床ヌブリとの出逢いによって「木」という素材を真剣に考えることになったと云う。

彫刻家米坂さんは故郷をすて、異国ともいえるような北海道へ渡って必死に生きようとした人々の苦闘の歴史を木に刻み込んでいこうとしている。米坂さんの生み出す木彫は北海道の叙事詩であり、祖先への祈りともいえる。

初期の作品で、「北の枢」「国境」「送り火」「祖国」「漂泊」、これらの作品に一様にして見えるのが、故郷を喪失した流れものの悲しみである。

米坂さんの作り出す木彫のフォルムは、実に簡潔である。削ぎおとせるだけ削ぎおとしたギリギリのところから作家の言葉を紡ぎ出されている。

自由の機関誌、米坂さんの「独白」の文に「モノ作りは好きなものを好きなように作り発表する。それが世の中から求められれはばそれに勝る幸せはないのだ。」と書かれている。

御冥福をお祈り申し上げます。

［収蔵作品］
北海道近代美術館六点・北海道立旭川美術館九点・札幌芸術の森美術館七点
モニュメント四十点・公園・学校・後場等に設置、その他99年まで百点作品を発表
最高裁判所大ホールレリーフ制作

渡部一重さん・風の如く

森　　真

「親父の好きだった遊び」

生涯彼のつくろうとした彫刻のテーマは、家族や子供、また身近な猫のような動物だったのだろう。そういったものに向ける彼のまなざしは、少年時代の遠い日の故郷宮崎の風景が色濃くにじみ出ている。

彼との出会いは、私がまだ学生だった頃彼が美大を訪れて来た時だった。彼はすでに自由美術に出品していて、まだかたちをつくることに精一杯だった私にとってはずいぶん先輩に思えたものだった。私が自由美術に出品し始めた頃になると、彼は自信に溢れた作品を続々に発表し続け、ある一つの詩的な境地に到った感があった。

彼が影響を受けた人で忘れてならないのは横尾茂氏との交流である。彼は横尾さんを慕っていたし、横尾さんも一重、一重と言ってよく二人で飲んでいた。横尾さんをモデルにした頭像を本展に出品したこともあった。二人の共通点は、何か巨大な権力のようなものに逆らってみたり、怯えたりするような生き方があったように思える。突然、強行な態度があると思えば一転、コンプレックスのような卑屈さが見えたりする。いずれにせよ作家同志として横尾氏の影響は強かったのではないだろうか。

二千年の始めの頃、相模原市の野外彫刻展に彼は参加していて、後に私も出品することになるが、その頃になると彼の作風は、屋外を意識した木材の抽象的なベースに塑像を組み合わせた作品になってゆく。光や風を捉えようとしていたのだろうか、より詩的な表現を求めていた。

そして晩年、病が少しずつ彼を壊してゆくなか、作品にあらわれる本来の彼の牧歌的な世界と、それとは別の狂気のようなものが混在していたように思える。

しかし、彼のまなざしは遠い日々のノスタルジアと共にあって、その眼に映る景色は色褪せることはない。

遺作展示の作品は、少年一重さん自身と両親への郷愁であり、その作品は彼の妹さんの元へゆくことになり、その場所で時をまた刻む。

垣内治雄氏を偲んで

下　倉　節　子

「弥生 2015」

垣内氏は、昭和６年に横浜で生まれ、昨年４月に 84 歳で亡くなられるまで横浜で育ち、学び、活動された彫刻家であった。横浜国立大学で安田周三郎氏に彫刻を学ぶ。卒業と同時に自由美術展に出品、初入選。以来 60 年にわたって自由美術展に出品し、平成元年に平和賞を受賞されている。先年亡くなられた峯孝氏、井上信道氏に師事し、活動の場を広げられていった。横浜各地に、モニュメントが残されている。市立学校の記念碑や鶴見公会堂、日本丸パークの少女像、大学箱根駅伝鶴見中継所に作られた走る像など 20 点余り。人体の美しさ、躍動感を求めた作品群が制作された。人体のモデルをつかって制作する場として、横浜彫塑研究会を井上信道氏とともに設立したのも垣内氏であった。私も大学を卒業し、就職と同時に入会させてもらったのが垣内氏との出会いであった。氏は、先生としてよりも、会員は皆同じ立場の仲間として、制作を見守ってくれる良き先輩でもあり、いつも制作後の飲み会を楽しみにしていた。飲むと上機嫌、饒舌になるのが常にあった。

二年程前に癌の手術を受けてから、ひどく痩せられたが、制作の意欲は失わなかったように思う。亡くなる直前の２月まで新作を発表されていた。

生前から垣内氏とも懇意であったギャラリーで、新盆に遺作展を行うことになった。出品作品選びのために私も彫塑研究会の面々と垣内氏のアトリエに向かった。アトリエに伺うのは始めてだったが、家の内、外に凄まじい数の作品でうめつくされているのに驚かされた。一つの作品発表に数多くのエスキースが制作され、型取りされて残されている。また、人体の動きをとらえたクロッキーを描くように、たくさんの彫刻作品がつくられ山積みされていた。二階の居間にもスケッチブックや美術関係の本などで溢れていた。情熱をかたむけて、制作に励んでいた様子が痛いほどにわかる。外にあった大作は痛みがひどく、アトリエにあった小、中作品二百点余りを出品することになった。奥様にも相談し、ご本人には申し訳ないがカンパの形で安価でお分けすることにし、８月 13 日から 19 日までアートスペースイワブチで開催された。初日から故人と親交のあった多くの方達が集まり、最終日までにほとんどの作品がそれぞれの方々のもとに。お酒を愛し、友人達と語り合うのを楽しみにしていた垣内さんらしい、あたたかい会になったと思う。真摯に取り組み、愛した作品たちの行く末を見守っているに違いない。

個展・グループ展 記録　2016年3月～2017年2月

2016

3／1 ㈫～3／6 ㈰	第32回森野会展	寺床まり子	町田市立国際版画美術館
3／4 ㈮～3／9 ㈬	醍醐イサム個展		ギャラリーれがろ
3／5 ㈯～3／13 ㈰	平澤重信展		なかお画廊
3／5 ㈯～3／27 ㈰	平澤重信 緑川俊一二人展	平澤重信	SEN ART GALLERY
3／5 ㈯～4／3 ㈰	関正和展		丸亀市立資料館1階企画展示室
3／5 ㈯～4／10 ㈰	関正和展		あーとらんど ギャラリー
3／8 ㈫～3／13 ㈰	2016 “U展"	伊藤雄人 宇野之雅 岡野久四郎 笠井順子 河野節 窪田旦佳 小暮芳宏 小林成行 島雄康一郎 関根加代 高橋エイタロー 手島邦夫 寺床まり子 友成光臣 西澤武徳 野口高史 松本明 山口武 吉村俊 依田元明	埼玉県立近代美術館
3／11 ㈮～3／19 ㈯	東日本大震災 チャリティーアート展	寺床まり子	セッションハウス・ガーデン
3／12 ㈯～3／23 ㈬	一木平蔵展		ギャラリー絵夢
3／14 ㈪～3／19 ㈯	竹永亜矢作品展-平和への道 - The Emperor's visit		美術家連盟画廊
3／14 ㈪～3／26 ㈯	渋谷信之 山田宴三 よろずふきこ展	よろずふきこ	不二画廊
3／15 ㈫～3／20 ㈰	第8回 春季 朝霞市 美術協会展	小山雅子 竹井侑子 竹内敏江 醍醐イサム	にいざほっとぷらざ
3／15 ㈫～3／30 ㈬	The 8th anniversary Exhibition part2	よろずふきこ	MI gallery
3／16 ㈬～3／21 ㈪	村田知子展		練馬区立美術館区民ギャラリー
3／21 ㈪～3／27 ㈰	公文淳子展		銀座アートホール
3／21 ㈪～3／26 ㈯	イブ達の物語Ⅳ	笠井順子、寺床まり子	ギャラリー アーチストスペース
3／24 ㈭～3／29 ㈫	平澤重信展		ギャラリー恵風(埼玉)
3／26 ㈯～4／3 ㈰	京都芸大同窓会アートフェア2016	よろずふきこ	京都市立芸術大学ギャラリー
3／27 ㈰～4／2 ㈯	伊藤朝彦展		千駄木画廊
4／2 ㈯～4／9 ㈯	ミズテツオ		Callery KINGYO
4／4 ㈪～4／9 ㈯	ARTFILE exhibitiun 25	寺床 まり子	K's Gallery
4／4 ㈪～4／9 ㈯	相良由紀個展		中和ギャラリー
4／4 ㈪～4／13 ㈬	醍醐イサム個展		Gallery銀座一丁目
4／16 ㈯～4／27 ㈬	新井富美子・中林三恵展		ギヤラリー・イン・ザ・ブルー
4／19 ㈫～4／24 ㈰	第９回 断片-16展	上順子	ギャラリーSHIMA
4／22 ㈮～4／27 ㈬	EXHIBION POETIC	奥野佳守子 醍醐イサム 吉村俊 依田元明	ギャラリーれがろ
4／25 ㈪～4／30 ㈯	渡辺雪子展		K's Gallery
4／25 ㈪～4／30 ㈯	FIVE ELEMENTS	醍醐イサム	GINZAギャラリーアーチスト スペース
4／25 ㈪～4／30 ㈯	小野田勝謙彫刻展		いりや画廊
4／26 ㈫～5／1 ㈰	黄人展		広島県立美術館
4／28 ㈭～5／1 ㈰	西尾裕展		広島県立美術館
5／4 ㈬～5／10 ㈫	川崎文雄彫刻展		万国橋ギャラリー
5／9 ㈪～5／21 ㈯	抽象作家による「My,ポップアート展」	醍醐イサム	ギャラリーＧＫ
5／10 ㈫～5／22 ㈰	つながる 現代の美術 6つの流れ	原田明	法然院 講堂
5／11 ㈬～5／21 ㈯	醍醐イサム個展		ギャラリーストークス
5／16 ㈪～5／21 ㈯	美濃部民子展		ギャルリー志門
5／23 ㈪～5／28 ㈯	嘉屋重順子展		あらかわ画廊
5／24 ㈫～5／29 ㈰	2016“U展"千駄木展	手島邦夫 手島まき子 寺床まり子 友成光臣 西沢武徳 宇野之雅 加藤義雄 河野節 笠井順子 伊藤雄人 小野精三 窪田旦佳 小暮芳宏 小林成行 関根加代 島雄康一郎 高橋エイタロー・依田元明	千駄木画廊
5／25 ㈬～6／1 ㈬	小野田志津代×小暮芳宏展		ギャラリーストークス
5／25 ㈬～5／31 ㈫	NEW「新しい人」の方へ展2016	渡辺学	山脇ギャラリー
5／25 ㈬～6／1 ㈬	渡邉知平彫刻展		ギャラリーストークス
5／26 ㈭～6／1 ㈬	Exhibition of Daejeon international arts exchange association 2016	那須ゆいか	
5／27 ㈮～5／29 ㈰	うつなみ画会展	坂内義之 田垣内愛治 的場脩二 的場幹英	熊野市民会館

6／2 ㈭～6／7 ㈫	小山雅子展		Gallery銀座一丁目
6／6 ㈪～6／14 ㈫	ミズ テツオ展		ギャラリーゴトウ
6／13 ㈪～6／19 ㈰	伊藤雄人展		ギャラリーストークス
6／13 ㈪～6／18 ㈯	森山誠個展		札幌時計台ギャラリー
6／15 ㈬～6／22 ㈬	平澤重信展　-閾-		ギャラリー枝香庵
6／16 ㈭～6／22 ㈬	新宿・自由美術14人展		ギャラリー絵夢
6／20 ㈪～6／30 ㈭	「それでも"青い鳥"を探しに」展	平澤重信	羽黒洞
6／20 ㈪～6／25 ㈯	共存の社会的意味展	醍醐イサム　寺床まり子	GINZAギャラリーアーチスト スペース
6／20 ㈪～6／25 ㈯	坂本照子展		中和ギャラリー
6／21 ㈫～6／26 ㈰	第42回立川平和美術展	大野美代子	立川市市民会館展示室・地下1階(たましん RISURU ホール)
6／22 ㈬～7／2 ㈯	BUNTER WALD	寺床まり子	ギャラリーヴェルジェ
6／25 ㈯～8／21 ㈰	山梨の女性アーティストたち	小川リエ	山梨県立美術館
6／28 ㈫～7／3 ㈰	竹内義夫展		ギャラリーCreate洛
7／4 ㈪～7／15 ㈮	夏のシンフォニー展	寺床まり子	中和ギャラリー
7／5 ㈫～7／18 ㈪	３ＲＦ展	小川リエ	ギャラリーストークス
7／5 ㈫～7／17 ㈰	則松正年展		ギャラリーとわーる
7／6 ㈬～7／18 ㈪	16thアートinはむら展	大野美代子　渡辺雪子	羽村市生涯学習センターゆとろぎ
7／7 ㈭～7／16 ㈯	綺羅星★展	宇野之雅　笠井順子　窪田旦佳　小暮芳宏　深澤義人　古田由美子　依田元明	千駄木画廊
7／9 ㈯～7／16 ㈯	ミズテツオ・國定正彦2つの魂展	ミズテツオ　國定正彦	ギャラリー・イン・ザ・ブルー
7／12 ㈫～7／18 ㈪	第38回静岡県自由美術展		静岡県立美術館県民ギャラリー
7／12 ㈫～7／24 ㈰	醍醐イサム個展		ギャラリー絵夢
7／14 ㈭～7／31 ㈰	女性美術展	上順子　佐藤廣子　浜田夏子　藤原順子　野田勢津子　よろずふきこ	ギャラリーかもがわ
7／14 ㈭～7／24 ㈰	第5回姫路城現代美術ビエンナーレ2016展	上順子 佐藤廣子 よろずふきこ	イーグレひめじB1F
7／15 ㈮～7／17 ㈰	'16 栃木自由美術展		足利市民会館 別館展示室
7／18 ㈪～7／23 ㈯	2016北海道グループ展（39th）	北島裕子　工藤牧子　黒田 孝　さとうえみこ　佐藤泰子　澤田弘子　杉吉 篤　高橋靖子　永野曜一　深谷栄樹　牧 輝子　森山 誠	札幌時計台ギャラリー　A室
7／18 ㈪～7／23 ㈯	Prints 6 exhbition	笠井順子	楪画廊
7／19 ㈫～7／24 ㈰	第54回 自由美術関西展		京郡市美術館2F北
7／26 ㈫～7／31 ㈰	第58回東中国自由美術展		岡山県天神山文化プラザ第1展示室（1F）
7／26 ㈫～7／31 ㈰	「スカル」	小野田志津代　小暮芳宏　中林三恵　日沖弘美	ギャラリーストークス
8／1 ㈪～8／6 ㈯	第22回現代美術日韓展	村秋木綿　宇野之雅　吉見博　寺床まり子	ギャラリーくぼた2&5F
8／2 ㈫～8／7 ㈰	守山幸伸展		ふじた画房２Ｆギャラリー
8／4 ㈭～8／7 ㈰	2016年・第52回 自由美術・秋田展		秋田さきがけ展示ホール
8／4 ㈭～8／13 ㈯	日美展第21回総合水墨画展	醍醐イサム	国立新美術館
8／4 ㈭～8／10 ㈬	第7回和解と和合の日・韓展	青木俊子　小暮芳宏　平澤重信	栃木県総合文化センター2F第3ギャラリー
8／10 ㈬～8／16 ㈫	＜私の、意中の画家＞	平澤重信	ギャラリー枝香庵
8／13 ㈯～8／19 ㈮	垣内治雄遺作彫刻展		アートスペースイワブチ
8／17 ㈬～8／21 ㈰	第43回自由美術香川		善通寺市美術館
8／20 ㈯～8／24 ㈬	第51回自由美術群馬展		ノイエス朝日
8／22 ㈪～8／31 ㈬	Friend【フレンド】展　Part5	古田由美子	ギャラリー絵夢
8／27 ㈯～9／3 ㈯	醍醐イサム個展		ギャラリー・イン・ザ・ブルー
8／31 ㈬～9／11 ㈰	第52回神奈川県美術展　1期展[平面立体]	満武京子	神奈川県民ホールギャラリー
8／31 ㈬～9／11 ㈰	“TOKYO” art show	小野田志津代　小暮芳宏　児玉寿美子　松崎九鬼	ASHOK JAIN GALLERY
9／1 ㈭～9／4 ㈰	2016山口自由美術展		防府市地域交流センター アスピラート
9／5 ㈪～9／11 ㈰	坐・琳派展　弐	醍醐イサム	画廊 楽Ⅰ
9／5 ㈪～9／11 ㈰	第二期 スカラベ展XIV PART2	小林美穂	あかね画廊
9／7 ㈬～9／17 ㈯	満天の星展Ⅴ	平澤重信	あらかわ画廊
9／7 ㈬～9／12 ㈪	植田良章展		ギャラリーかもがわ
9／8 ㈭～9／13 ㈫	2016大分自由美術展		大分県立美術館　展示室A
9／8 ㈭～9／20 ㈫	醍醐イサム個展1976-2016		たましんギャラリー
9／12 ㈪～9／18 ㈰	第９回テモアン展	深澤義人	ギャラリー向日葵
9／14 ㈬～9／25 ㈰	小西熙展		ギャラリーかもがわ

9／15㈭～9／25㈰	ASHIGARI FINE ART 2016	醍醐イサム	あしがり郷「瀬戸屋敷」
9／15㈭～9／19㈪	大木政子展		つかさ画廊
9／19㈪～9／24㈯	新潟の美術家たち展Ⅵ	長谷部昇	JAA gallery
9／21㈬～9／28㈬	2016 Spiegelbild		ギャラリーストークス
9／22㈭～10／3㈪	自由美術物故作家小品展		千駄木画廊
9／24㈯～10／4㈫	田川久美子展		ギャラリー K
9／26㈪～10／1㈯	瀧田紀子展		K's Gallery
9／26㈪～10／1㈯	小暮芳宏展		K's Gallery
9／26㈪～10／7㈮	平澤重信展		あらかわ画廊
9／26㈪～10／2㈰	EXHIBITION by ZERO！	醍醐イサム	あかね画廊
9／29㈭～10／5㈬	水野利詩恵展		ギャルリー・コバンダール
9／30㈮～10／6㈭	平澤重信・高橋靖子 二人展		ギャラリーストークス
10／1㈯～10／10㈪	猫と愛しの動物達	平澤重信	Art Space 水音
10／8㈯～12／17㈯	第40回キリスト教美術展	M.A.池田宗弘	関西学院大学博物館(入館無料)
10／10㈪～10／16㈰	オマージュ藤林叡三		あかね画廊
10／17㈪～10／22㈯	額の宝さがし＆ミニ絵画展	寺床まり子	GINZAギャラリーアーチスト スペース
10／30㈰～11／5㈯	佐藤泰子展		札幌時計台ギャラリー 2F A･B室
10／31㈪～11／6㈰	窪田旦佳展		ギャラリー八重洲・東京
11／4㈮～11／9㈬	岩出まゆみ・岡村光哲展	岡村光哲	ギャラリーれがろ
11／7㈪～11／26㈯	寺床まり子展		調布画廊
11／7㈪～11／13㈰	深澤義人展		ギャラリー八重洲・東京
11／9㈬～11／28㈪	平澤重信展		山口画廊
11／13㈰～11／27㈰	醍醐イサム展		ギャラリー樂座
11／14㈪～11／23㈬	大野 修 個展		セッションハウス・ガーデン
11／14㈪～11／19㈯	手島邦夫展		千駄木画廊
11／15㈫～11／20㈰	第24回朝霞市美術協会展	醍醐イサム	朝霞市中央公民館ギャラリー
11／19㈯～11／27㈰	二人展	羽田二朗	中村美術サロン
11／20㈰～12／4㈰	アートビューイングOME2016	大野美代子	青梅市立美術館
11／21㈪～11／26㈯	姫井美貴子版画展		中和ギャラリー
11／21㈪～11／26㈯	斎藤國靖「仮説としての絵画」	斎藤國靖	art space kimura ASK? /アートスペースキムラ･アスク
11／28㈪～12／4㈰	岡本勝展		アートカゲヤマ画廊
12／5㈪～12／17㈯	醍醐イサム個展		K's Gallery
12／6㈫～12／11㈰	則松正年展		直方谷尾美術館
12／6㈫～12／11㈰	小西熙展		ギャラリー恵風
12／10㈯～12／17㈯	アール・デサンプル展		千駄木画廊
12／19㈪～12／28㈬	2016年ギリギリ展	相良由紀 瀧田紀子 中野渡みね子	K's Gallery
12／19㈪～12／25㈰	21世紀美術交流展	一ノ澤文夫 相良由紀 中野渡みね子	千駄木画廊
12／19㈪～12／24㈯	３人展	醍醐イサム	ギャラリーゴトウ
2017			
1／4㈬～1／9㈪	一ノ澤文夫･相良由紀 二人展		練馬区立美術館
1／6㈮～1／11㈬	第36回自由美術大阪支部作家展		サンパルギャラリー２F
1／9㈪～1／14㈯	石田貞雄展		中和ギャラリー
1／14㈯～1／21㈯	第25回新春現代作家小品展	伊藤雄人 宇野之雅 笠井順子 小暮芳宏 醍醐イサム 深澤義人 依田元明 岡村光哲	千駄木画廊
1／17㈫～1／22㈰	第３回 熊野現代作家展	坂内義之 田垣内愛治	熊野市文化交流センター
1／23㈪～1／29㈰	静岡県自由美術		アートカゲヤマ画廊
1／27㈮～2／8㈬	現代抽象作家展- surprise 10 -	石田貞雄 霊山邦夫 村秋木綿	ギャラリー絵夢
2／3㈮～2／12㈰	西尾裕展		神楽坂セッションハウス 2Fガーデン
2／3㈮～2／8㈬	美術協会展	醍醐イサム 竹内敏江	にいざほっとぷらざ ギャラリー1室
2／3㈮～2／19㈰	アートセレクション展･GUNMA	多胡宏	ギャラリー・オーツー
2／3㈮～2／26㈰	前橋の美術2017～多様な美との対話～	多胡宏	アーツ前橋
2／13㈪～2／19㈰	八重洲コンテンポラリー 抽象作家展	醍醐イサム 深澤義人 古田由美子	ギャラリー八重洲・東京
2／20㈪～2／25㈯	Hills展	河野節 宍戸美恵子 村秋木綿 西村幸生 森 真	千駄木画廊
2／20㈪～2／26㈰	2017彫刻９人展		銀座アートホール

◇ 編 集 後 記 ◇

今回、６名の方の追悼文を掲載しました。若き日に『戦争』を経験して、激動の時代を生きてこられた方々です。

特に、川上十郎さんには、私が、十代の終わり、アトリエ『フラン』で、ご指導いただいて以来、いろいろな所でご一緒させていただき、ありがとうございました。

残された７０歳以下のものは、『戦争を知らない世代』です。大きく価値観の変わる事のない時間を生きてきて、『平和』というものに慣れすぎて、壊れることを考えていないように思えます。今の時代の危うさ、指導者は、持っているもの（自衛隊）を、使いたくてしょうがないのでしょうか。

３・１１以来、停止していた原発が、何一つ問題が解決していないのに、再稼動してきています。

戦後７０年培ってきた価値観が今少しずつ変わろうとしているようです。後悔しないように、生きて行きたいものです。

自由美術の仲間と、良い仕事が出来れば、幸せなことです。

（西村）

《自由美術協会公式ホームページのご案内》

パソコンのインターネット上で自由美術協会の公式ホームページが見られます。
このホームページ上で、自由美術協会の活動内容や詳しい情報が見られます。
（自由美術展、巡回展、佳作賞展、地方支部展、会員の個展、グループ展　等、各展覧会のお知らせ。自由美術展受賞者と受賞作品、会員作品の紹介、他）国内、海外の一般の方々に巾広く見てもらうことができます。是非ご活用下さい。

☆展覧会情報（DM等）をお寄せ下さい。随時受け付けています。
（宛　先）〒182--0017
東京都調布市深大寺元町3-16-7
自由美術協会ＨＰ係　相田勤
（メール）mail@jiyubijutsu.org

自由美術協会公式ウェブサイト（ホームページ）
http：//jiyubijutsu.org/
E-mail
mail@jiyubijutsu.org
（「自由美術」で検索すると見られます）

○２０１７年度会費納入について

郵便振替払込用紙で、８月３１日までにお願いします。
なお、窓口での納入よりATM機納入が安くなりましたので、是非、ATM機での納入をお願いします。払込の際の受領証は大切に保管して下さい。

編　　集　自由美術編集部
西村幸生　　手島邦夫
柴田紀子
記録･AD　相田　勤
発　　行　自由美術協会（http://jiyubijutu.org/）
〒207-0031　東京都東大和市奈良橋3-572-1
TEL・FAX　042－561－1152　田中秀樹 方
メールアドレス　office@jiyubijutsu.org